目次

外部要素の追加.....1
外部要素の追加: イントロダクション.....1
外部コマンドの挿入.....1
BASICスクリプトの挿入.....5
BASIC スクリプトに変数を渡す、及び、BASIC スクリプトから変数を渡す.....7
外部の測定ルーチンの添付.....9
データ参照のためにポインター使用.....10
外部オブジェクトの挿入.....11
新規作成.....12
ファイルからの作成.....14
アイコンとして表示.....14
オブジェクト タイプ一覧.....15
外部オブジェクトを実行用にマーク.....16
ファイルを異なる表示方法で表示.....18

外部要素の追加

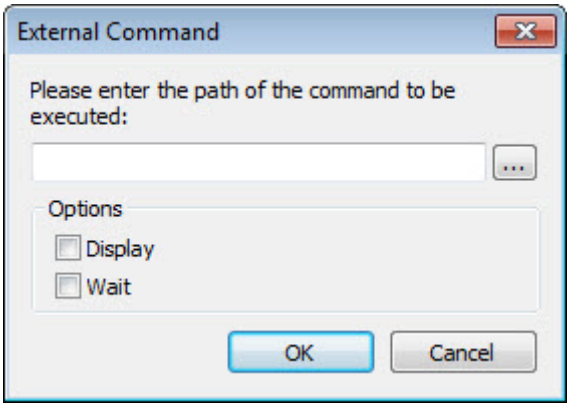
外部要素の追加: イントロダクション

本章では、測定ルーチン内に挿入が可能な、各種の外部要素について記述しています。これらには、外部アプリケーション、BASIC
スクリプト、測定ルーチン、及び、お客様の測定ルーチンの能力をさらに高める、その他のオブジェクトが含まれます。

この章に記述された主なトピックは、次のとおり:

- 外部コマンドの挿入
- BASICスクリプトの挿入
- 外部の測定ルーチンの添付
- 外部オブジェクトの挿入

外部コマンドの挿入



外部コマンド ダイアログ ボックス

挿入 | 外部 コマンド
メニューオプションを選ぶと、編集ウィンドウ内にコマンドを挿入でき、それがマークされ実行されると、測定ルーチンにある外部実行可能なファイル、または、バッチ
ファイルが実行されます。

- 通常のDOSコマンドは、バッチ ファイル内に置かれた場合、実行が可能です。
- PC-
  DMISが外部コマンドを実行するために、そのコマンドは、編集ウィンドウ内でマークされていなければなりません。

- 有効な経路とファイル名の使用が必要です。
- ルーチン実行中、`EXTERNALCOMMAND/DISPLAY`コマンドに出会った時、PC-DMISはルーチンの実行を中断し、メッセージを表示します。測定ルーチンの実行を継続するには、[**OK**]をクリックします。

外部コマンドを挿入するには:

挿入 | 外部コマンドメニュー コマンドを選択します。**外部コマンド** ダイアログボックスが現れます。

1. ダイアログボックス内で、外部コマンドを特定して下さい。これを行うには、いずれか利用可能なボックスにファイルの完全パスを入力するか、または**...**ボタンを使ってファイルを検索します。
2. PC -DMISに外部コマンドを実行するとき、ルーチンの実行が一時停止されていることを知らせるメッセージを表示させる場合には**表示**チェックボックスをマークします。メッセージ上の**OK**をクリックするまで、実行は中止されます。詳細は、「表示チェックボックス」トピックを参照してください。
3. **[OK]** をクリックします。コマンドが編集ウィンドウ内に挿入されます。

このオプション用の編集ウィンドウ のコマンドラインは、以下のようです:

```
EXTERNALCOMMAND/DISPLAYSTATE ; path name
```

DISPLAYSTATE = このトグルフィールドは、PC-DMISが実行を一時停止するか否か、そして、外部実行を知らせるメッセージを表示するか否かをコントロールします。このフィールドは、「表示」と「非表示」の間で切り換えを行います。
path name =
この文字列は、実行ファイルまたはバッチファイルのパスおよびファイル名を表示します。

表示チェックボックス

外部コマンドダイアログボックス(**挿入 | 外部コマンド**),の**表示**チェックボックスが選択された場合、PC-DMISは外部コマンドを実行するために、ルーチンの実行が一時停止していることを知らせるメッセージを表示します。表示されたメッセージで**OK** をクリックするまで、PC-DMISは実行を一時停止します。

警告表示オプション ダイアログ
ボックス内で、このメッセージをオンにした場合のみ、このメッセージが表示されることに注意して下さい。

このメッセージを表示するには:

1. **セットアップ オプション**ダイアログ
   ボックスにアクセスするために、F5を押して下さい。

2. **一般** タブにある、**警告**ボタンをクリックして下さい。**警告表示オプション** ダイアログ
   ボックスが表示されます。

3. 「**OK、プロセスのために、実行が一時停止**」チェック
   ボックスを選択して下さい。実行を続けるには、**OK**を選択して下さい。

表示チェックボックスがマークされていない場合には、PC-DMISはどのような種類のメッセージ表示もせずに、特定の外部コマンドを実行します。実行可能なファイル、またはバッチ ファイルが同時に実行されている間、PC-DMISは実行し続けます。チェックボックスがマークされていない場合には、**待機**オプションが有効になります。詳細については、「待機チェックボックス」トピックを参照してください。

待機チェックボックス

外部コマンドダイアログ・ボックス(**挿入|外部コマンド**)中の**待機**チェックボックスは単に**表示**チェックボックスが選択されていない場合のみに利用可能です。

> **待機**チェックボックスがマークにされた場合、外部コマンドが動作を終了するまで、測定ルーチンの実行が一時停止しています。
>
> **待機**チェックボックスが選択されていない場合、外部コマンドがその動作を終了していなくても、測定ルーチンは実行を継続します。

[...] ボタン

外部コマンドダイアログボックス (**挿入 | 外部コマンド**)の **...**
ボタンは、「**ファイルを開く**」ダイアログボックスを表示します。これにより外部コマンドのファイル名を選択できます。ファイルを開くと、PC-DMISは**外部コマンド**ダイアログ
ボックスに完全パスを挿入します。

外部コマンドを、メニュー項目、あるいは、ツール バー項目として作成

PC-DMISでは、ツールバーとメニューをカスタマイズし、.EXE、.BAT、または、.BAS
ファイルに連結した新メニュー項目を受け入れることができます。これを行う方法に関する情報に

ついては、「ユーザー インターフェースの利用」の章にある「ユーザー
インターフェースのカスタマイズ」の項目を参照して下さい。

例 - ファイル表示のために外部コマンド使用

この例ではEXTERNALCOMMANDを使用してファイルを開き、表示するバッチファイル(外部プログラム)の作成方法が示されています。例えば、画像ファイルを表示したいんですが[**挿入 | レポートコマンド | 外部オブジェクト**]メニューオプションを使用したくないとします。バッチファイルの中のコマンドライン(またはDOS)プロンプトを使用してこれを実行できます。

注記: この方法の利点、または、不利な点 (お客様のニーズ次第で)
は、測定ルーチン実行の終了時のレポートにおいて、画像が表示されないということです。

ステップ 1 : 画像を表示するために、バッチ ファイルを作成して下さい:

1. メモ帳などのテキストエディタを開きます。最初の行では、次のコマンドを入力します。

   スタート<PATHWAY>

   ここで、<PATHWAY> は、図への絶対パスです(例えば、 start d:\temp\mypart.gif)。

   このコマンドは、デフォルトの画像ビューアー
   アプリケーションを用いて、その画像ファイルを開くよう、Windowsに指示します。

2. そのファイルを保存し、それに.bat というファイル名拡張子を与えます。

ステップ 2 : 外部コマンド ダイアログ ボックスを、バッチ ファイルにリンクします:

1. **挿入 | 外部コマンド**を選択して下さい。**外部コマンド** ダイアログ ボックスが現れます。

2. **[...]**ボタンをクリックします。**[開く]**ダイアログボックスが表示されます。

3. **開く** ダイアログ
   ボックスの一番下にある**ファイルのタイプ**リスト下で、そのファイルのタイプを**BAT ファイル(*.bat)**に変更して下さい。

4. バッチ ファイルに進み、それを選択して下さい。

5. **開く** ボタンをクリックして下さい。**開く** ダイアログが閉じ、**外部 コマンド** ダイアログ ボックスがここで、そのバッチ ファイルへのパスを表示します。

ステップ 3 : 動作をコントロールし、コマンドを挿入します:

1. 測定ルーチンの実行を休止するメッセージを表示するか、非表示するためにどちらかを選んでください。詳細については、「表示チェックボックス」トピックを参照してください
   。

- メッセージを表示するために**外部コマンド**]ダイアログボックスから**表示**チェックボックスをオンにします。
- メッセージを非表示するために**外部コマンド**]ダイアログボックスから**表示**チェックボックスのマークをクリアします。チェックされていない場合には、**待機**オプションが有効になります。詳細については、「待機チェックボックス」トピックを参照してください。

2. [**リンク**] チェックボックスがオフになっていることを確認してください。
3. **[OK]** をクリックします。`EXTERNALCOMMAND`が編集ウィンドウ内に挿入されます。

```
EXTERNALCOMMAND/DISPLAY ; E:\BATCH\TEST.BAT
```

ステップ４: ルーチンを実行すること:

1. 編集ウィンドウ内で、上記の結果表示される、コマンドラインをマークして下さい。
2. ユーザの測定ルーチンを実行します。

PC-DMISでは、図を表示する、特定のバッチプログラムを実行し、そして、**外部コマンド**ダイアログボックスでのお客様の選択次第で、図の表示中に、測定ルーチンの実行を継続するか、あるいは、一時停止します。

BASICスクリプトの挿入

PC-DMISのBasic言語拡張子がソフト機能の強力な拡張子を提供します。Basic言語スクリプトあるいはアプリケーションがPC-DMIS (あるいはほかのところからインポート される)に書かれて、またユーザ定義ツールバーのボタンにリンクして、強力なマクロの実行を可能にします。基本のバージョンはPC-DMISの支援されているバージョンで（ダイアログエディタで作成される）カスタムダイアログ、ODBCサポート、およびOLEサポートなどの高級言語の機能のすべてを提供します。

付記: 基本的なスクリプトを作成して、使用する能力は、PC-DMIS CADとPC-DMIS CAD++の標準要素としてできます。PC-DMISプロで利用できません。

サンプルスクリプト読み込め用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようです:

```
SCRIPT/FILENAME = C:\PCDMISW\sample.bas
FUNCTION/Main,SHOW=YES,,
ENDSCRIPT/
```

FILENAME= フィールドは、測定ルーチンに挿入し、共に実行したい。BASICファイル(.bas ファイル名 拡張子)への経路を特定します。

FUNCTION/Main
フィールドは、「メイン」のサブルーチンを実行します。BASICファイル内の異なるサブルーチンや、関数を実行のために指定すると、これを変更できます。

SHOW= フィールドでは、Basic
スクリプトによって自動的に作成されたコマンドが、実行後に測定ルーチン内に表示されるか否かが決定されます。

- SHOW=NOに設定されると、要約モード、コマンド
  モード、または、DMISモードにおいて、作成されたコマンドが表示されません
  (しかし、コマンドは依然、インスペクション レポートに表示されます)。また、PC-DMISは、作成されたコマンドを測定ルーチンと共に保存しません。

- SHOW=YESに設定すると、作成されたコマンドが測定ルーチン内で表示され、PC-DMISは、作成されたコマンドを測定ルーチンと共に保存します。以前のバージョンから測定ルーチンの互換性を維持するために、デフォルトはSHOW=YESです。

PC-DMISの*Basic言語参照 マニュアル*
には、この追加パッケージが詳細的に記述されています。Basic 言語パッケージと共にヘルプ
ファイルを受け取っていない場合には、PC-DMIS ソフトウェア
サポート代理店に連絡してください。

コマンドとして、BASICスクリプトを挿入するには

挿入 | 基本スクリプト メニュー オプションは、**基本スクリプト挿入** ダイアログ
ボックスを表示します。

このダイアログ
ボックスを用いると、測定ルーチンに、BASICスクリプトのオブジェクトを追加することができます。Basic
スクリプトのオブジェクトは、その実行時に実行されるべきBASICスクリプトの名称を含んでいます。BASICスクリプトの実行が終了するまで、測定ルーチン実行は継続されません。実行中に、BASICスクリプトがオブジェクトを作成する場合、それらのオブジェクトは測定ルーチンに挿入され、実行されます。BASICスクリプトに挿入されたオブジェクトは、他のオブジェクトとは異なる色でハイライト表示され、BASICスクリプトによってそれらが作成されたことを示します。Basic
スクリプトに関するより詳しい説明については、PC-DMIS BASIC 文書を参照して下さい。

メニュー項目、または、ツール バー項目として、BASICスクリプトを挿入するには

PC-DMISでは、ツールバーとメニューをカスタマイズし、.EXE、.BAT、または、.BAS ファイルに連結した新メニュー項目を受け入れることができます。これを行う方法に関する情報については、「ユーザー インターフェースの利用」の章にある「ユーザー インターフェースのカスタマイズ」の項目を参照して下さい。

BASIC スクリプトに変数を渡す、及び、BASIC スクリプトから変数を渡す

PC-DMISコードからのみ、変数をBASICスクリプトに渡す渡すことができますが、BASIC スクリプトから渡すことはできません。

PC-DMISからBASICスクリプトに渡すことができる、唯一対応している変数タイプは:

- 整数
- 文字列
- ダブル

変数はカンマ区切りの値(引数)として引き渡されます。これらはSCRIPT/FILENAMEコードブロック内のFUNCTION/
文で定義されます。FUNCTION/文は引数のみならず、引き渡された値を取得するスクリプト内のサブルーチンも指定します。デフォルトでは、この行は、最初に次酔うのに読み取ります:

```
FUNCTION/Main,SHOW=YES,,
```

これは"Main"という名のサブルーチンが引数を取得することを意味します。SHOW=YESは単にコマンドブロックを閉じるENDSCRIPT/文を表示するか非表示にするかを示します。

上記の `SHOW=YES`
に続く2つのコマンドにご注目ください。これらは最初の引数を定義するフィールドを示しています。フィールドに値を入力し、キーボードのTabキーを押します。するとPC-DMISは、これが最初の引数であることを示すために自動的に最初の値の前に"ARG1="を追加します。さらに、もう1つカンマが追加され、もう1つの引数の追加が可能となります。追加の引数は、そこで値が定義されると"ARG2=" 、 "ARG3="のように接頭辞が付けられます。

下記の例を参照して下さい。

注記: PC-DMISの変数は、測定ルーチンの実行中のみに、値を持つことができますが、学習時には、PC-DMISの変数は常に、ゼロの値を持ちます。

例 1: 変数を渡すために、関数ラインを使用

以下のコマンドは、TEST.BASという名称のBASICスクリプトを実行します。それはまた、実行に当たって、TEST.BASスクリプト内のFUNCTION/ラインで定義された変数を渡します:

```
CS2=SCRIPT/FILENAME= D:\PROGRAM FILES\PCDMIS35\TEST.BAS
FUNCTION/ShowVars,SHOW=YES,ARG1=3,ARG2="Hello",ARG3=2.5,,
STARTSCRIPT/

ENDSCRIPT
```

ここで、今、TEST.BAS
スクリプトを表示します。測定ルーチン実行上、渡された変数をそれぞれのメッセージボックス内で表示します。

```
Sub ShowVars(IntVar As Integer, StrVar As String, DoubleVar As Double)

msgbox 「渡された整数変数は」 & IntVar

msgbox 「渡された文字列変数は」 & StrVar

msgbox 「渡されたダブル変数は」 & DoubleVar

End Sub
```

例 2: GetVariableValue およびSetVariableValue メソッドを使用した変数の引渡し

以下の例では、まず第一に、PC-
DMISコードを使用して、ユーザーからの整数値を受け取り、それを 変数 V1 に割り当てます。

```
C1=COMMENT/INPUT,整数の値を入力してください。
ASSIGN/V1 = INT(C1.INPUT)
COMMENT/OPER,BEFORE SCRIPT: 変数は:
,V1
```

それはあとでTEST2.BASというBASICスクリプトが呼び出されます。

```
CS1=SCRIPT/FILENAME= D:\PROGRAM FILES\PCDMIS35\TEST2.BAS
FUNCTION/Main,SHOW=YES,,
STARTSCRIPT/
ENDSCRIPT/
```

以下が、TEST2.BASです。

```
Sub Main
Dim App As Object
Set App = CreateObject ("PCDLRN.Application")
```

```
Dim Part As Object
Set Part = App.ActivePartProgram
Dim Var As Object
Set Var = Part.GetVariableValue ("V1")
Dim I As Object
If Not Var Is Nothing Then
Var.LongValue = Var.LongValue + 1
Part.SetVariableValue "V1", Var
MsgBox "V1 is now: " & Var.LongValue
Else
Msgbox "Could Not find variable"
End If
End Sub
```

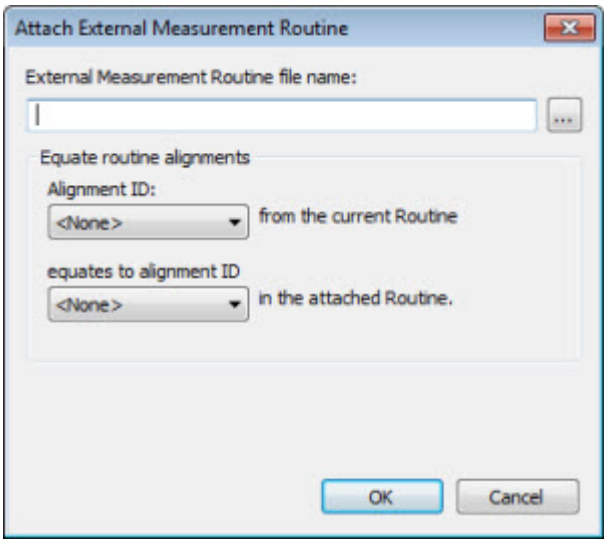
このスクリプトは、変数 V1 を取り、`GetVariableValue`、及び、`SetVariableValue` 自動操作方法を用いて、V1
をひとつずつ増分し、それから、測定ルーチンにV1用の新規の値を設定します。

その後、PC-DMIS は、オペレーターのコメント内に、変更された変数を表示します。

```
COMMENT/OPER,AFTER SCRIPT: Variable is now
,V1
```

外部の測定ルーチンの添付

「**挿入|測定ルーチンの添付**」メニューオプションは、
「**外部の測定ルーチンを添付**」ダイアログボックスを開きます。ユーザはこのダイアログボックスを使用して、現在の測定ルーチンに測定ルーチンを添付することができます。このことは、PC-DMISが実際に、その特定の測定ルーチンにあるすべてのコマンドを添付し実行するという意味ではありません。その代わり、ポインターがその測定ルーチンに添付され、寸法と要素のデータにアクセスすることができます。「参照データへのポインター使用」を参照して下さい。



外部の測定ルーチンの添付ダイアログ ボックス

このダイアログ ボックスには、以下のオプションがあります:

外部測定ルーチンのファイル名
このボックスは、ユーザが添付しようとしている測定ルーチンの経路を入力することができます。必要に応じて、ユーザは**ブルース**ボタン (...)
を使用すれば、ファイル名と経路をもボックスに置くこともできます。

ルーチン位置揃えの等化
このエリアでは、利用可能な一覧からパーツ整列を選択することによって、2つの測定ルーチン間でパーツ整列を共有することができます。より詳しい説明については「パーツ整列の作成と使用」の章にある「パーツ整列の等化」を参照して下さい。

[測定ルーチンを添付]メニューオプションは、複数アームモードで作業している場合に特に便利です。このオプションを使用すれば、
アーム1の測定ルーチンにアーム2システムからの測定ルーチンを添付することができます。測定ルーチンを添付するとデータの共有が可能となり、両方のアームで同じアラインメントの実施、一方の測定ルーチンの要素データをもう一方の測定ルーチンへ引渡して計算、またはその他諸々の共同的な作業が可能となります。複数アーム
モードに関しての詳細は、「複数アームモードの使用」の章を参照して下さい。

データ参照のためにポインター使用

ユーザは添付の測定ルーチンにアクセスすると、常にその測定ルーチンからのデータを使用します。このデータを参照する場合、お客様の測定ルーチンの所在位置を含む、ポインター（または、変数）を参照*しなければなりません*。

この例を参考にして下さい:

現時点での測定ルーチンに、TEST_A.prgを添付していることとします。その付けコマンドは、以下のようになります。

```
CS1=ATTACH/C:\PCDMISW\TEST_A.PRG, Machine=

EQUATE/LOCAL ALIGNMENT = A1, ATTACHED ALIGNMENT = A1
```

ポインタ`CS1`を注意してください。このポインタは、添付された測定ルーチンからデータを抽出するために使用されます。

ここで、現時点での測定ルーチン内のTEST_A.prg
から、要素F1の測定されたX値を表示したいと想定します。使用するステートメントは、以下のようになります。

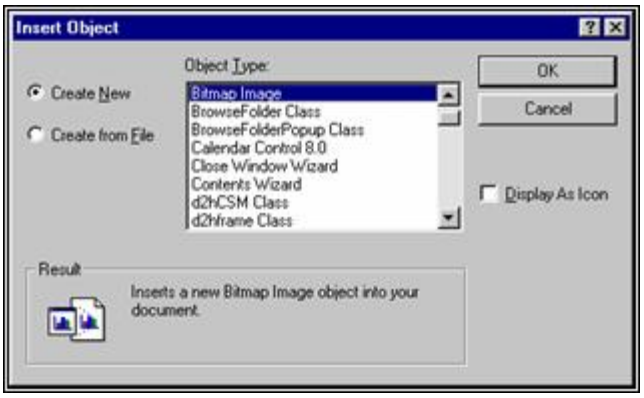
```
COMMENT/OPER,"The X value for F1 from the attached measurement
routine is:"

,CS1:F1.X
```

コード`CS1:F1.X`は、本質的に、TEST_A.prgを見、要素F1を見つけ、X値を表示するよう、PC-DMISに指示します。これが、PC-DMISでポインターを参照する方法です。

PC-DMISはまた、組み立て、または、寸法ダイアログ
ボックス内に、添付された測定ルーチンの持つ要素を一覧表示します。PC-
DMISは、要素の一覧ボックス内に、添付された測定ルーチンのIDポインターを表示します。プラス記号（+）がポインタの左に表示されます。このプラスサインをクリックすると、添付された測定ルーチンの全要素が展開または折り畳み表示されます。添付された測定ルーチンの持つ、要素すべてを表示するために、画像を拡大した後、組み立てプロセス、または、寸法測定プロセスにおいて、使用する要素を選択することができます。

注記:
添付されたルーチンのポインターを選択することはできません。そのポインターに関連する拡張IDのみ、選択が可能です。

外部オブジェクトの挿入



オブジェクト挿入ダイアログ ボックス

挿入 | レポート コマンド | 外部オブジェクト メニュー
オプションを選択すると、編集ウィンドウ内のお客様のシステムに、他のアプリケーションからの様々なタイプのアプリケーションを入力します。挿入可能な、オブジェクトのタイプは、コンピューター
システムにインストールされたアプリケーション次第で決まります。挿入できるオブジェクトの例には、 グラフィックス画像、サウンド
クリップ、映画クリップ、MIDIクリップ、文書、ワークシート及びデータベース表等が含まれます。

手順ビデオ、オーディオ手順、または、書かれた手順を測定ルーチン
をインポートするには、外部オブジェクトを使用して下さい。

重要事項: 外部オブジェクトを利用する場合には、編集ウィンドウがコマンド モード
にあることを確認して下さい。

新規作成

Create New

新規作成 オプション**(挿入 | レポートコマンド|**
外部オブジェクト)を選択すると、編集ウィンドウ内の特定の位置に、特定のオブジェクト
タイプのファイルを新しく作成することができます。オブジェクトのタイプを **オブジェクト**
タイプ
一覧から選択して下さい。オブジェクトは、その測定ルーチン内の要素の直後か直前のみに配置できます。

新しいオブジェクトを作成し、それを編集ウィンドウ内に配置するには:

1. **新規作成**オプションを選んで下さい。

2. **オブジェクト**
   タイプ一覧から、ご希望のオブジェクトのタイプを選択して下さい。そのオブジェクトが小さい長方形の点で区切られ、編集ウィンドウ内のボックスに表示されます。マウスを使用してそのボックスを別の場所にドラッグしたり、小さい長方形を使用してそのボックスをサイズ変更することができます。

3. オブジェクト内をダブル
   クリックして下さい。アプリケーションが作動して、編集ウィンドウ内に特定のオブジェクトが開きます。

4. 挿入されたアプリケーションに専用のツールを用いて、そのオブジェクトを変更して下さい。

5. それが終了すると、挿入されたオブジェクトの*外側*の編集ウィンドウの一部にある
   をクリックして下さい。

例: 編集ウィンドウ内に *新規の*Word文書を含めたいとします:

1. **新規作成**オプションを選んで下さい。

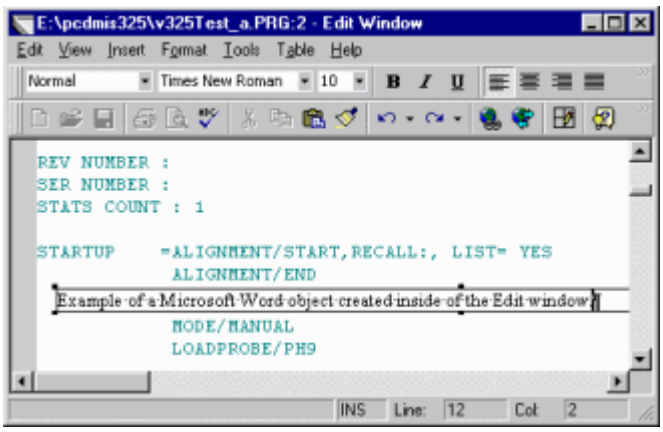
2. **オブジェクト タイプ**一覧から、Word文書オブジェクトを選択して下さい。

3. マウスを用いて、編集ウィンドウ内のご希望の位置に、オブジェクト
   ボックスをドラッグして下さい。

4. 当ボックスをご希望のサイズにサイズ変更して下さい。

5. Word文書オブジェクト内に、情報をタイプ入力して下さい。

6. 通常のPC-
   DMISの編集ウィンドウ機能に戻るには、オブジェクトの外側をクリックして下さい。Word文書は、編集ウィンドウ内に留まります。



編集ウィンドウ内に作成された、Word文書の例。編集ウィンドウのメニューとツールバーが、作成中のオブジェクトに対応したアプリケーションのメニューとツールバーに置き換えられていることに、注意して下さい。

ファイルからの作成

Create from File

「**ファイルから作成**」オプション（**挿入|レポートコマンド|外部オブジェクト**）は、編集ウィンドウにオブジェクトとして以前に作成したファイルを挿入することができます。

以前に作成されたオブジェクトを挿入するには:

1. **ファイルからの作成**オプションを選択して下さい。
2. オブジェクトとして挿入予定のファイルを含む、ディレクトリへのパスをタイプ入力して下さい。あるいは、**ブラウザ**ボタンを用いて、正しいディレクトリに進んで下さい。
3. オブジェクトとして挿入するファイルを選択して下さい。
4. **OK**ボタンをクリックします。そのオブジェクトが、ここで、編集ウィンドウ内に表示されます。マウスを使用してそのボックスを別の場所にドラッグしたり、小さい長方形を使用してそのボックスをサイズ変更することができます。

例:
以前に書かれたCMM操作の手順を含む、Word文書を編集ウィンドウ内に挿入したい場合、**ファイルからの作成** オプションを選び、その文書を含む
ディレクトリに進んで、**OK**ボタンをクリックして下さい。編集ウィンドウ内のオブジェクトボックス内に、その文書が現れます。マウスを用いて、編集ウィンドウ内で、オブジェクトボックスを置きたい位置に移動し、そのサイズを調整します。

リンク

Link

ファイルからの作成 オプション(**挿入 | レポートコマンド | 外部オブジェクト**)を選ぶと、お客様のオブジェクトを編集ウィンドウの「リンク」することができます。そのオブジェクトをそのオリジナルのファイルに戻してリンクし直す場合、オリジナルファイル内のこれまでの変更内容が、また、編集ウィンドウ内で更新されます。

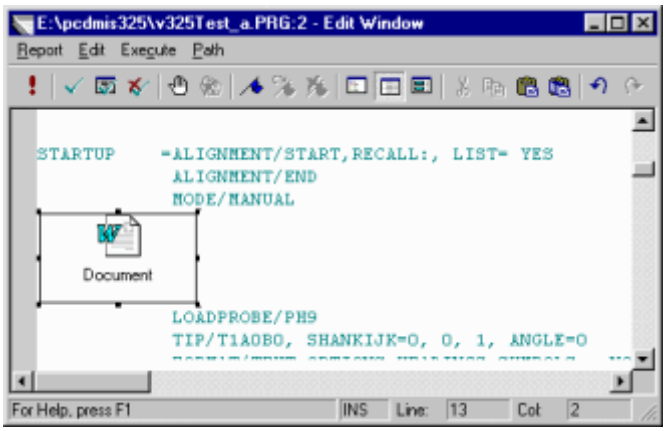
アイコンとして表示

Display As Icon

アイコンとして表示 チェック ボックス (**挿入 | レポートコマンド | 外部オブジェクト**)を用いると、埋め込まれたオブジェクトの情報を直接表示するかわりに、それ

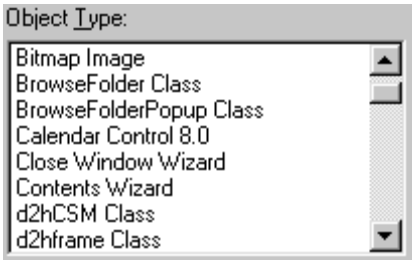
をアイコンとして表示することができます。編集ウィンドウ内で、そのアイコンをダブルクリックすると、アクティブになります。

例: ワード文書を編集ウィンドウ内に置き、**アイコンとして表示**チェックボックスを選択して下さい。Word文書がアイコンとして現れます。しかし、そのアイコンをダブルクリックすると、埋め込まれたアプリケーションが開き、Word文書に含まれている情報を表示します。



アイコンとして表示されている、Word文書オブジェクトの例

オブジェクト タイプ一覧



オブジェクト タイプ一覧のサンプル

オブジェクトタイプ一覧 (**挿入 | レポートコマンド | 外部オブジェクト**)は、お客様のコンピューターシステムで利用可能なオブジェクトのタイプを含んでいます。これらは、お客様のハードドライブにインストールされたアプリケーションプログラム次第で、個々のコンピューターによって変わります。

オブジェクトのタイプを選ぶには:

1. オブジェクトの検索には、スクロールバーか、あるいは、アップ矢印キーとダウン矢印キーを使用して下さい。

2. そのオブジェクトを選択して下さい。

3. **OK**ボタンをクリックします。

外部オブジェクトを実行用にマーク

デフォルトで、測定ルーチンが実行されている場合、外部のオブジェクトを印刷しますが、実行をしません。但し、あるオブジェクトと、望ましい行為を実行し、印刷しないこともある。

例:
グラフィックス画像を埋め込むと、ご希望の動作は、そのグラフィックス画像のレポートへの印刷であるかもしれません; または、サウンド
クリップや映画クリップを埋め込むと、ご希望の動作は、実行時にそのクリップを再生するためのオブジェクトの実行であるかもしれません。

外部オブジェクトには、4種の実行モードがあります:

1. 印刷 – 実行しない
2. 印刷しない – 実行しない
3. 印刷しない – 実行する
4. 印刷 – 実行する

異なるモード間で切り換えを行うには、編集ウィンドウにおいて外部オブジェクトと同じラインに、挿入ポイントがある間に、 F3 を押して下さい。PC-DMISは、細斜線と境界線を用いて、オブジェクトのその時点での実行モードを表示します。下記の例を参照して下さい。

- 細斜線 -
  グラフィックス画像上にかかる斜めの線。細斜線がある時には、オブジェクトはレポートに印刷されません。
- 細斜線のある境界線 -
  グラフィックス画像の周りにかかる斜めの線。細斜線のある境界線がオブジェクトの外枠を囲む時、オブジェクトは実行されます。

例	動作
細斜線なし - 細斜線付き境界線なし	• 印刷 • 実行しない

細斜線 - 細斜線付き境界線なし 	• 印刷しない • 実行しない
細斜線 - 細斜線付き境界線 	• 印刷しない • 実行
細斜線なし - 細斜線付き境界線 	• 印刷 • 実行

注記:実行アクションは外部オブジェクトがダブルクリックされた時に起こるアクションと常に同じです。メディアクリップに対しては、通常、このデフォルトアクションは*再生*です。その他のオブジェクトのほとんどは、デフォルトのアクションは*編集*です。

再生 -

サウンドクリップはサウンドを再生します。動画クリップは動画などを再生します。

編集 -

編集のデフォルト行為をしているオブジェクトは通常実行される必要があるオブジェクト

になりません。ただし、アプリケーションオブジェクトの中にはアクティベートされた途端にカスタムベーシックスクリプトを実行する機能を持つものもあります。Word文書またはExcelスプレッドシートには、外部オブジェクトのこのタイプの例です。これらの種類のオブジェクトとPC-DMIS自動化コマンドを使用して、測定ルーチンからのデータを使用してオブジェクトを変更することができます。例えば、Excelグラフはベーシックスクリプトを持つ測定ルーチンに挿入可能であり、アクティベート時にPC-DMISの自動化コマンドを使用して測定ルーチンからデータを取得し、それに基づいてグラフを更新してから検査レポートに印刷することが可能です。

ファイルを異なる表示方法で表示

ファイル表示の代替方法では、PC-DMISのEXTERNALCOMMAND 編集ウィンドウコマンドを使用します。より詳しい説明については「例 - ファイル表示のために外部コマンド使用」を参照して下さい。